

IV

辰野金吾の建築と育てた弟子たち

国家から辰野金吾に与えられた使命は、西洋の建築技術を日本に定着させることと、後進の建築家を育てることであった。辰野の残した建築と育てた弟子たちは、日本の近代建築の礎となった。

1. 辰野金吾博士 作品集成絵図と描かれた建築

辰野金吾は 200 を超える建築に携わった。その主要なものを作品集成絵図に描かれた作品などから紹介する。



辰野金吾博士 作品集成絵図 後藤慶二画 1916年 辰野家蔵

辰野金吾設計の建物を集めた街並みが描かれている。辰野金吾の弟子後藤慶二（1883-1919年）が、辰野の還暦を記念して描いた作品。日本銀行本店が中心に大きく描かれていることから、建築家・辰野金吾にとっての日本銀行本店の重要性がみとれる。日本銀行の支店も2店舗（大阪支店と京都支店か）が描かれている。



帝国製麻株式会社 1915年



東京駅丸の内本屋(重文) 1914年竣工
東京駅(中央停車場)の建設は1889年には決定していたが、辰野金吾に設計の依頼があったのは1903年で、1908年に着工し6年半後に竣工した。



両国国技館

1909年竣工
相撲興行は屋外で行われてきたが、辰野葛西事務所により常設のドーム型鉄骨板張で屋内施設がつけられた。辰野は同年「相撲常設館」(『建築雑誌』)で設計について言及している。



ロイヤル・アルバート・ホール

1871年竣工 ロンドン
両国国技館と同じドーム型のホール。辰野金吾は「外観壯麗にして進歩したる文明的建物なり」と述べている。

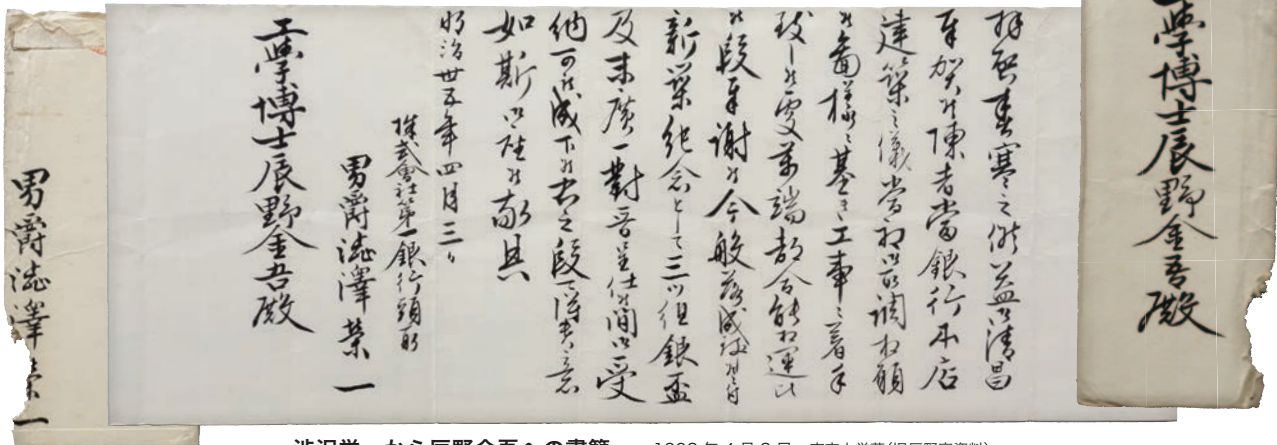


辰野金吾設計の第一銀行本店(二代目)

1902年竣工
東京大学蔵(旧辰野家資料)
辰野金吾の第一銀行手帳より第一銀行頭取の渋沢栄一は茅場町の自宅同様、その設計を辰野金吾に依頼した。施工は初代と同じ清水組による。



擬洋風建築の第一国立銀行(初代)
1872年竣工 900080
二代目清水喜助
第一国立銀行は1896年に「第一銀行」となった。



渋沢栄一から辰野金吾への書簡 1902年4月3日 東京大学蔵(旧辰野家資料)
第一銀行頭取男爵渋沢栄一より辰野金吾への第一銀行本店の新築記念の品の送付状。

2. 日本銀行建築を通じて育てた弟子達

日本銀行本店や支店の建築を通じて、辰野金吾は長野宇平治の他にも数多くの弟子を育て、日本の建築界に寄与した。建築教育者としての多大な功績の一つである。



辰野金吾の還暦記念 集合写真 1915年 辰野家蔵

還暦祝賀の宴で辰野金吾の家族と共に写る 88 名の弟子達。辰野建築に携わる辰野葛西事務所、辰野片岡事務所の両所員と共に、岡田時太郎、長野宇平治、岡田信一郎を始めとする日本銀行本店・支店の建築に携わった 21 名の技師・技手が写っている。



- ①…辰野 金吾
- ②…岡田信一郎
- ③…葛西 萬司
- ④…岡田時太郎
- ⑤…片岡 安
- ⑥…長野宇平治

●…日本銀行の建築に携わった技師・技手

建築教育者としての辰野金吾は、東京帝国大学工科大学（現・東京大学工学部）の建築学教授として後進の指導に励むほか、東京職工学校（現・東京工業大学）、工手学校（現・工学院大学）、早稲田大学理工学科（現・理工学部）、明治専門学校（現・九州工業大学）、などの創立・運営にも大きく関わった。還暦の祝宴には、山崎久太郎や小林懋を始めたとする、機械科など建築学科以外を卒業し、辰野の下で設備・機械技術者となった弟子も多く参集した。辰野は建築家であると同時に工学技術者でもあった。

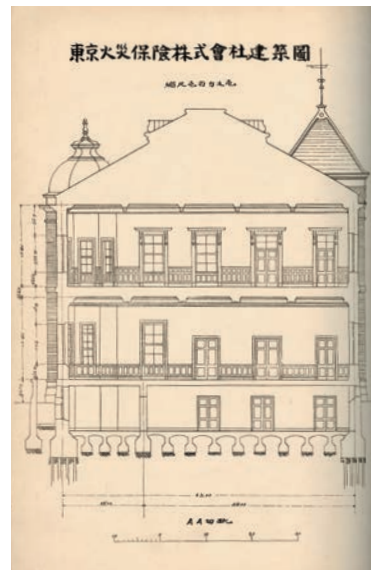
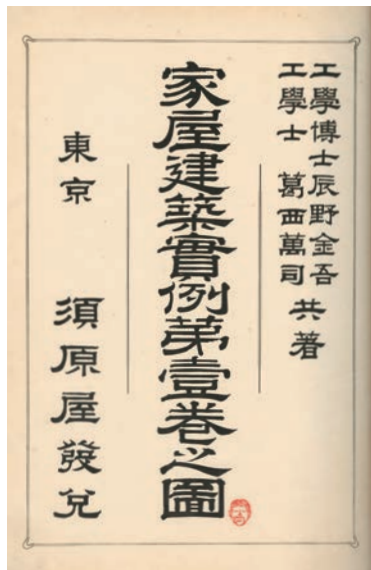


葛西萬司 (1863-1942年)

葛西萬司は工部大学校を卒業した1890年に日本銀行技師となり、辰野の片腕として本店のほか西部支店と大阪支店の設計に携わり、1900年に日銀を辞した後、1903年に辰野と共に辰野葛西建築事務所を開設する。葛西は日銀時代から終生、辰野の篤いパートナーであった。

家屋建築實例第壹巻之図

辰野金吾、葛西萬司 1908年
辰野金吾の東京でのパートナー葛西萬司との著書。日本銀行本店の製図主任を担当するなど、葛西のデザイン力は定評があった。



盛岡銀行 1911年(現存・重文)
葛西が中心となり設計した作品。現・岩手銀行旧本店本館。



3つの辰野金吾建築と外堀
左から日本銀行本店本館、日本銀行南分館(1898年)、東京火災保険株式会社(1905年)。

片岡安 (1876-1946年)

片岡(旧姓・細野)安は、工部大学校を卒業した1897年に日本銀行技師となり大阪支店の建築を担当する中、日本生命創業者の片岡家の養子となり1901年に日銀を辞した後、1905年に辰野と共に辰野片岡建築事務所を開設する。辰野の没後も、関西財界を舞台に多くの作品を残す。



奈良ホテル 1909年(現存)
西の迎賓館として、関西でも多くの建築を担っていた辰野金吾と片岡安に設計が委ねられた。辰野片岡事務所は赤煉瓦スタイルの「辰野式」とどまらず異なる多様なデザインを残した。

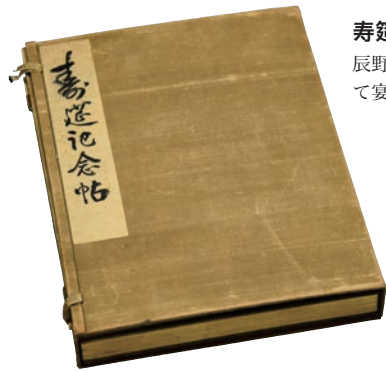
岡田信一郎 (1883-1932年)

岡田信一郎は、工部大学校卒業後東京美術学校(現・東京藝術大学)の講師の傍ら、辰野に見こまれ日本銀行嘱託として小樽支店の建築に関わる。その後、東京美術学校と早稲田大学の教壇に立ちながら、明治生命館など多くの作品を残す。



大阪市中央公会堂 1918年(現存・重文)
原案は岡田信一郎。日本銀行小樽支店の建築に関わるなか、デザインコンペに応募し1位となる。その審査委員を辰野金吾が務めていた。岡田の原案に基づいて辰野金吾と片岡安が実施設計を行った。

3. 還暦記念の寄せ書き

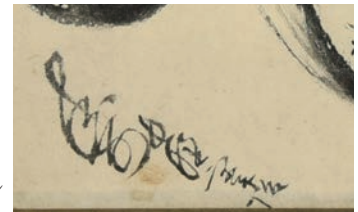
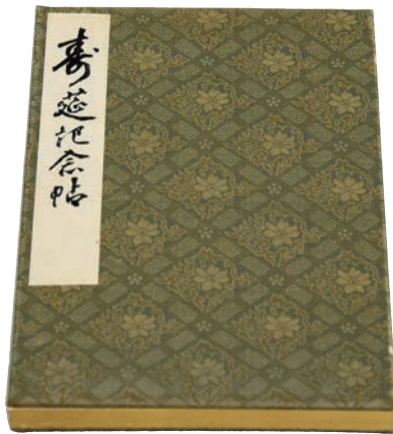


寿筵記念帳 1915年11月 辰野家蔵

辰野金吾の還暦記念の祝賀会の時に弟子などから贈られた芳名帳。還暦祝賀会の模様を記録には、本芳名帳について宴席時に広間で書かれたこと、「記念帳には各人得意の墨痕に、祝賀の意を表はし」といった言及がある。



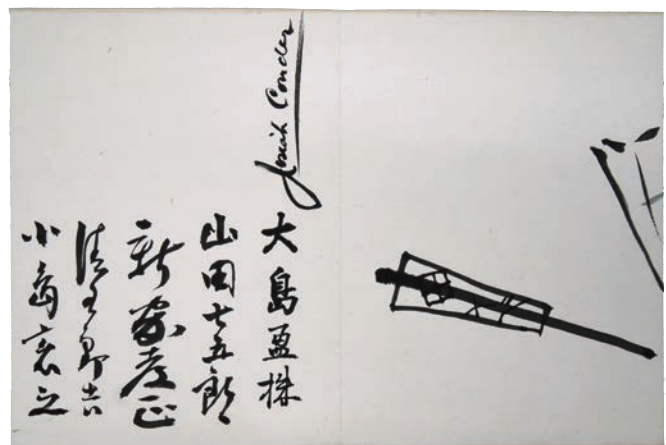
帳の裏面には弟子らの「寿」のサインが書かれている。



長野宇平治のサイン



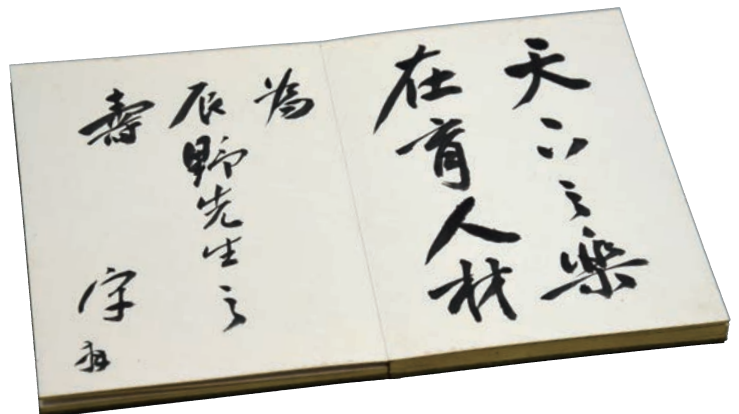
伊東忠太



辰野金吾の師ジョサイア・コンドル (Josiah Conder) のサイン



佐野利器

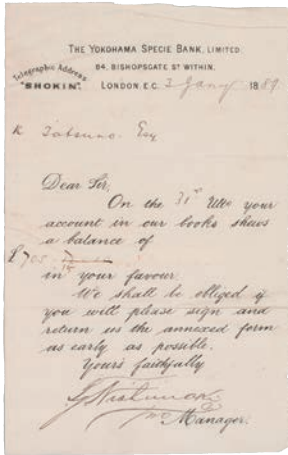


長野宇平治

辰野金吾の預金関係資料

三井銀行当座預金通帳 1886年～1896年

辰野は、建築事務所を設立した1886年に、三井銀行に当座預金口座を開設した。小切手を呈示して現金で引き出すほか、他の銀行への送金と思われる取引も見受けられ、財布代わりに利用していたことが窺われる。



年月日	摘要	金額	受取人姓名	金額
6.21	お3割引	480.00		5000
8.8	出金	20000		10000
11.6		20000		20000
7.7		100		20000
10.9		100		20000
11.21		100		20000
		61300		20000
		61300		20000

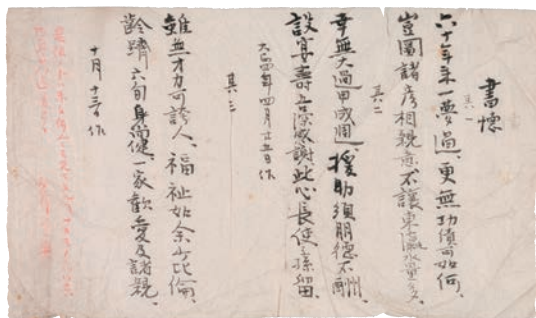


横浜正金銀行ロンドン支店預金関係書類

1889年頃

日本銀行本店設計のため調査で出張中の辰野は、横浜正金銀行ロンドン支店に口座を持っていた。辰野は、この口座から滞在費等の支払いを行っていたものと思われる。辰野に対して、横浜正金銀行ロンドン支店から、1888年末の口座残高の確認を求める通知が送られている。705ポンドの残高があったことが分かる。

辰野金吾と漢詩



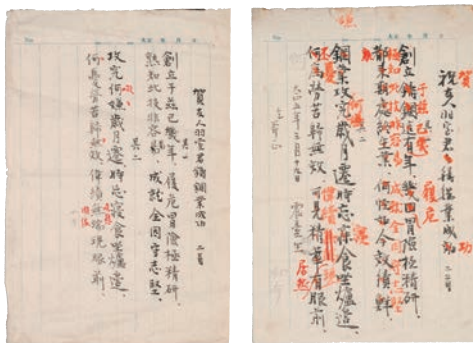
漢詩「書懷」 1915年

辰野は幼少より『四書五経』や漢学を学んでいたことが知られている。辰野は還暦を過ぎた大正期に多くの漢詩を詠んだ。本作では、60年が一時的な夢のように過ぎ、功績もなくどうすべきか、という60歳を過ぎた辰野の心境が表されている。



添削を受けた漢詩「春草」ほか 大正期

辰野は「震台」というペンネームで七言絶句を詠んだ。漢詩は季節を題材として扱うことが多く、辰野もそうした題材を選んだ。漢詩の師である鳥居義行より朱書による添削を受けていたことが残された多くの封書からわかる。



「賀友人羽室君成功」及び草稿 1916年

辰野が友人である羽室庸之助（1868-1944年）の事業の成功を祝って詠んだ七言絶句。羽室庸之助は、1899年に日本鑄鋼所で日本最初の鋼鉄製造を行った製鉄技術者で、のちに政治家になった人物。本作は、羽室が1913年に羽室鑄鋼所を創立したことを詠んでいる。辰野がこの漢詩を作るにあたって、推敲を重ねていた様子がうかがえる。

